

Title	リルケ『新詩集』をめぐる考察(二): 旧約聖書の二人の女性、「アビシャグ」と「エステル」
Author(s)	稲田, 伊久穂
Citation	ドイツ文学研究 (1995), 40: 67-89
Issue Date	1995-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/185415">http://hdl.handle.net/2433/185415</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## リルケ『新詩集』をめぐる考察（二）

——旧約聖書の二人の女性、「アビシヤグ」と「エステル」

稲田 伊久穗

『新詩集』のうち、旧約聖書を素材とした詩群は、第一部が三篇で、第二部が九篇である。この詩群の詩を配列の順に挙げれば、第一部は「アビシヤグ」、「ダビデ、サウルのまえて歌う」、「ヨシユアの民会」であり、第二部は「ヨナタンを悼む歌」、「エリヤの慰め」、「預言者のなかのサウル」、「サムエル、サウルのまえに現れる」、「預言者」、「エレミヤ」、「巫女<sup>みこ</sup>」、「アブサロムの離反」、「エステル」である。この他に第二部には「アダム」と「エヴァ」があり、この二篇は旧約聖書の「創世記」に関係があるが、その詩作のき、つか、けとなつたのは、バリのノートル・ダム大聖堂の正面に安置されたアダム像とエヴァ像であり、この二篇はのちの別な詩群のなかに入れている。そういうわけで、旧約聖書の詩群を形成するのは、第一部の「アビシヤグ」に始まる三篇と、第二部の「ヨナタンを悼む歌」に始まり「エステル」に終わる九篇になると言えよう。これらの詩の表題を見ても、一見して旧約聖書に登場する王とその王子、預言者が大多数を占めているのが分かる。前稿では、詩人のもつとも大きな関心が注がれていた「預言者」像について考察したが、本稿ではこの詩群のなかでも異色な「アビシヤ

グ」と「エステル」という二人の女性を歌った詩に焦点をあてて考察してゆきたい。

まず「アビシヤグ」と「エステル」の両詩は、旧約聖書の詩群のうちで女性の名前を表題にしたのはこの二篇のみであり、しかもそのうち前者の一篇がこの詩群を導く先頭に配置され、後者の一篇がこの詩群を締め括る最後の位置に配されて、さながら旧約聖書の詩群の他のすべての詩を前後から囲い込んでいくかのような観を呈している。これは、リルケが『新詩集』の詩の配列に並々ならぬ意を注いでいたことからも察せられるように、おそらくリルケ自身が最初から意図していたことであろう。それでは次に、二篇の詩の関係はどうであろうか？二人の女性が置かれた状況には、極めて近いものがある。「アビシヤグ」は王と側室とも言うべき乙女との関係であり、「エステル」は王と王妃との関係であるが、どちらもつまるところは王なる男性とその身近な女性との関係であると言えよう。そして、どちらもその類ない美貌ゆえに王に召された若き女性である。しかしながら、両詩における王と女性との関係は、その内容となるとまったく対照的である。「アビシヤグ」の方は、二人はついに結ばれなかったのであるが、この詩群を閉じる「エステル」の方は、二人は最後に内面において結ばれるのである。それではこれから、こうした二人の関係を問題の中心にすえながら、個々の詩の具体的な分析を通じて詩の内実を説明してゆきたい。

## 一

それではまず、一九〇五年から翌〇六年にかけての冬のあいだに、ムードンで書かれた「アビシヤグ」

(Absag I-II) から考察してゆこう。

I

彼女は横たわっていた。彼女の子供らしい腕は

召使たちによつて、萎えてゆく人のまわりに縛りつけられ、

その肉体の上で、彼女は甘い時間をいく時も横たわっていた、  
その人のずい分な高齡にかすかな不安をおぼえながら。

そしてときおり、鼻が鳴くと、彼女は

彼のひげのなかで、顔の向きを変えた。

そして夜であつたあらゆるものがやつて来て、  
不安と要求をたずさえ彼女のまわりに群がった。

星ぼしが彼女と同じようにふるえていた、

ひとすじの香りが、探るように寝室のなかを流れ、  
カーテンがそよいで、合図を送つてきた、すると  
そつと彼女の眼差がその合図のあとを追つた――。

リルケ『新詩集』をめぐる考察 (二)

しかし彼女は朦朧とした老人にすがりついていた、  
そして夜のなかの夜に捉えられることもなく、  
王の冷えてゆくからだの上に横たわっていた、  
処女のままた、また魂のように軽やかに。

II

王は、空虚な昼は座つて物思いにふけつていた、  
なし終えた数かずの行為、感じえなかつた愉悦、  
そして、めんどろをみた雌の愛犬のことを――。  
だが晩になると、アビシヤグが彼の上に  
蒼穹のように覆ってきた。彼の昏迷した生は  
彼女のひっそりとした乳房の星座の下で  
不評の海辺のように打ち捨てられていた。

そしてときおり、彼は女を熟知する者として、  
その眉毛のすきまから、固い表情の、

接吻を知らない口を認めたのであった。

そして見てとった、彼女の感情の緑の若枝が

彼の地底までは垂れ下がらなかつたのを。

彼はさむ気がした。彼は犬のように耳を傾け、

おのが最後の血のなかに自分を探し求めた。

この詩に歌われている老王は、明らかにダビデ王であつて、アビシヤグはこのダビデ王との関係で、「列王記上」の第一章一—四節に登場し、この詩もこの箇所<sup>1</sup>に由来するものである。この箇所は、ダビデ王の後継者を決める「王位継承の争い」を記した第一章の冒頭にあたる部分である。その他にアビシヤグは、同書第二章十七節に、後継者となつたソロモン王の異腹の兄アドニヤが、ソロモン王の母にアビシヤグを妻に所望する言葉とそれに関連する箇所(第二章二十一・二十二節)にわずかに名を留めるだけであるが、これらの第二章の箇所は当詩とはまったく関係がない。当詩に関係のある「列王記上」第一章一—四節はこのようである。

「<sup>1</sup>ダビデ王は多くの日を重ねて老人になり、衣を何枚着せられても暖まらなかつた。<sup>2</sup>そこで家臣たちは、王に言った。『わが主君、王のために若い処女を探して、御そばにはべらせ、お世話をさせましょう。ふところを抱いてお休みななれば、暖かくなります。』<sup>3</sup>彼らは美しい娘を求めてイスラエル領内をくまなく探し、シムム生まれのアビシヤグという娘を見つけ、王のもとに連れて来た。<sup>4</sup>この上なく美しいこの娘は王の世話をし、王に仕えたが、王は彼女を知ることがなかつた。」(新共同訳による)

この引用箇所と詩「アビシャグ」との関係について言えば、王が老齢であるということ、アビシャグが若い処女であり、彼女の主な役目は王の身体を暖めるということ、そして、彼女みずからの意志で王に仕えたのではないということ(聖書では彼女は探して連れてこられたのであり、詩ではそれゆえ彼女は老王の身体に縛りつけられている)、——これらの対応から当詩はいま引用した箇所全体に関係するが、しかし詩の描写場面は、引用箇所の最後の文章、つまり第四節のみに凝縮されている。これは詩人リルケが得意とする、詩構成上の優れた手法のひとつである。前稿で考察した「ヨシユアの民会」<sup>(2)</sup>などはそのもつともよい例で、波瀾に富んだヨシユアの長い一生を、さまざまな比喻や追憶の形象を織り込みながら、最後の告別の場面のみを凝縮し、その生涯を浮き上がらせた見事な一幅の織物に仕立てあげている。そこには、リルケの言葉の芸術家としての傑出した技量を見ることができよう。

それではここで、旧約聖書の原典との関係についてはこれぐらにとどめ、詩「アビシャグ」そのものの検討に入りたい。当詩はIとIIの二篇の詩から成り立っているが、その場面は夜の寢室のみに限られている。IIの冒頭部(三行)には、王の昼の有様についてわずかに触れられてはいるが、中心となる夜の場面を呼び出すための導入部にすぎない。そして、Iはアビシャグを主人公にして両者の関係が描かれているのに対して、IIは逆に王の側から両者の関係が描かれている。

まず、最初の詩Iから取りかかるところにしよう。この詩はいきなり「彼女は横たわっていた」(Sie lag.)と始まる。ただの二語から成るきわめて簡潔な文ではあるが、この詩の核となる内容をきわめて的確に言い表していると共に、この定動詞「横たわっていた」(lag)は、第一節の三行目にくり返し現れ、そしてまた、最終節の最

後の文にも登場して、この詩を締め括っている。さらに、次のIIにも「彼の昏迷した生は／…：打ち捨てられて  
「横たわって」いた」(Sein wirres Leben lag/verlassen. . .) というふうに現れてくる。この「横たわって  
た」という語は、いわばこの詩を導く中心モチーフになつていると言えよう。それに加えてこの語は、アピシヤ  
グという表題の名前と共鳴しあつて、この詩全体をおおう鮮明なイメージを冒頭から予め用意するのである。  
これに続く冒頭の「彼女の子供さう腕」(Ihre Kinderarme) は、聖書が「美しい」という言葉を二度用いて、  
しかも二度目にはそれに「この上なく」という最上級をつけて、彼女の美貌をすくく強調しているのに対して、  
彼女の「幼さ」を強調しているのである。このIとIIの二篇の詩にわたつて、彼女の美貌を表す言葉はいつさい  
使用されていない。彼女はそうした腕を「萎えてゆく」老人の身体に縛りつけられながらも、その体の上に「甘  
い時間をいく時も」(die süßen langen Stunden) 横たわつていたのである。「甘い」というのは男女が体を寄せ  
合う愛の時間であり、「いく時も」とは夜の長い時間のことであろう。しかし、彼女は彼の「ずい分な高齢に」  
かすかな「不安」を抱いていたのである。これは、表面的には相手のあまりにも掛け離れた高齢への不安である  
が、その底には「白鳥」が水面に下りるとききの不安(つまり、ある状態から他の状態へ移行するときの不安)の  
ように、まだ幼年性を残す彼女が完全な成人へと変化を遂げることへの不安が内在しているのではなからうか。  
そして、こうした不安の背後には死の不安が漂っているのである。第二節で、梟の鳴き声によつて、死への不安  
がいつそう明確になる。梟は夜の鳥としてギリシア・ローマの古代から死と関係の深い鳥とされ、梟の鳴き声は  
不幸や死を招く予兆と解されてきたからである。こうした彼女の不安感は、彼女を取り巻く周囲の事物に反映し  
てゆくのである。夜の闇に潜む不気味なものが彼女のまわりに群れ集まり、星ぼしが震え、香りが探るように部



屋のなかを流れ、カーテンが揺れる、これらはすべて彼女の不安感が周囲に映しだされた証である。彼女の眼はカーテンの「合図のあとを追った」が、ついには彼女はそれには従わず、「老人にすがりついていた」のである。初めは老人との間に疎遠感をもっていた彼女の態度も、最終節ではたとえそれが不安に起因するとはいえ、交わりを求める姿へと変化している。しかしながら、ついには両者が結ばれなかったことを示す「処女のままに」(jungfräulich) という言葉で、この詩の最後を強調している。「夜のなかの夜に捉えられることもなく」という一句も、彼女が交わりを得なかったことの証である。「夜」はすべてのものがその対象性をなくす世界で、のちの「開かれた世界」(das Offene)に近い世界であり、そこでは純粋な交わりが可能となるのである。彼女はそうした夜本来の世界に参入することができなかったのである。なお、ハンス・ペーレントは、「夜のなかの夜」(die Nacht der Nächte)を「意識のない状態へと落ち込むこと」(das Versinken in die Bewußtlosigkeit)と解している。このペーレントの言葉は、この場合その内容を様々に解釈できる曖昧さを残してはいるが、その文脈からするとどうも恐怖による「失神」を指しているようである。もしそうだとすると、「夜のなかの夜に捉えられることもなく」という一句と「処女のままに」という言葉とがあまりしっくりと結びつかず、違和感が残るのではなからうか。いずれにせよつきよく、二人の間には交わりがなかったのである。

それでは次に、二篇目の詩IIについて検討しよう。この詩でももう一度両者の関係が問われるが、今度は王の側からである。王は「空虚な昼は」(den leeren Tag)、座ってただ過去の追憶に耽っているだけである。なぜ「空虚な」であるのか？ リルケの場合、追憶という行為は本来重要な意味を持っている。過去への追憶が現在の創造に関わるとき、それは未来への贈り物、作品の誕生となるのであるが、王の場合、ただ過去への追憶が

あるだけで、創造との関わりもなく、過去が蘇ってもまたそのまま忘却の淵に消えてしまうだけである。追憶に耽ける「昼」が、「空虚」なのはそのためであろう。だが「晩」になると、アビシヤグは彼の上に覆いかぶさり、その体の上に「蒼穹」を作るのである。「彼の昏迷した生」は、その下で「不評の海辺」(verruine Meeresküste)のように「打ち捨てられた」(verlassen) ままである。両者の関係は、星を戴く「蒼穹」と打ち捨てられた「海辺」という、天と地の壮大なイメージによつて描かれている。アイヒェンドルフやハイネといったロマン主義の詩には「天と地」のあいだには壮麗な照応が見られるが、当詩にはまったく照応が見られず、互いに隔絶したままである。蒼穹は「ひっそりと」大地を覆うだけで、海辺は孤独のなかに「打ち捨てられた」ままである。こうして孤独のなかに横たわる王は、彼女に「固い表情の、接吻を知らない口」(den unbewegten, küsselosen Mund) を認め、「彼女の感情の緑の若枝」が「彼の地底」まで下りて来なかつたのを悟るのである。「緑の若枝」(grüne Rute) とは、ふつう柳や榛などの二又のしなやかな枝で、「占杖」(Wünschelrute) として水脈や鉱脈を探り当てるために用いられた。「彼女の感情の緑の若枝が／彼の地底までは垂れ下がらなかつた」という表現には、この「占杖」の意味もこめられている。アビシヤグは不安にかられて、老王の体にひとしと身を寄せたが、彼女の若々しい感情は、彼の体内にひそむ生命の水脈、おそらくはほとんど枯れかかつているその水脈、いわば命の泉にまでは達しえなかつたのである。彼女の若々しい生命と交わることのない彼の生命の泉は、おそらく蘇生することがないのである。王は、「犬」のようにじつと耳を傾け、「おのが最後の血のなかに自分を探し求めた」のである。これを境に自然に帰ろうとする自己の内部のなかに、消滅しようとする最後の個を探し求めるのである。そこには、王の孤独と断念を読み取ることができる。

ここで、この詩全体を振り返ってみると、男と女の、二人の愛がそのテーマになっている。一見すると、この詩は星を戴く「蒼穹」と打ち捨てられた「海辺」の壮大なイメージが際だつた印象を与えているために、愛における架橋できない裂け目を描いているように思われよう。もちろんその通りである。しかしよく読んでみると、その底を愛と別離の旋律がこの詩全体にわたつてたえず流れていて、それがIIの詩の最後の部分で大きくもり上がってくる。もちろん、結ばれない男女の愛がテーマであろうが、当時のリルケの愛の思想、つまり相手の所有、相手の応答を求めない「所有なき愛」の思想からすると、この詩はその枠内に入る詩である。このリルケの愛の思想には、触れ合つた瞬間に、別離へと転ずる厳しい裏面を持つていたのである。この詩の別離は即、死を表すものである。愛と別離(死)といつても、この詩の場合、別離(死)の方により大きなウェイトがおかれているのである。

## 二

それではこれから、旧約聖書の詩群を締め括る詩「エステル」(Esther)を考察してゆきたい。一九〇八年初夏にパリで書かれた詩で、詩の表題からも明らかのように、旧約聖書の「エステル記」に由来するものである。

侍女たちは七日のあいだ櫛ですき、

彼女の髪からその悲嘆の灰と

苦悩の残滓とをぬぐい去った、

それを戸外に運んで、陽にさらし、

それから純粹な香料で潤した、

その日もまた次の日も。だがついに

その時がやって来た。彼女は命ぜられもせず、

期限でもないのに、死者のひとりのように、

威嚇の口を開けた宮殿のなかへと歩み入ったとき、

女官たちに身をもたせかけながら、すぐさま、

彼女のすすむ道の果てに、あの男を見たのであった、

近づく者は死なねばならないあの男を。

彼の燦然たる輝きに、彼女は身につけていた

王冠の紅玉<sup>ルビ</sup>が燃え上がるのを感じた。

たちまち、彼女はまるで容器<sup>うつわ</sup>のように

彼の表情で満たされ、すでにまんまんと

王の威力を湛えて、はやくも溢れていった。

やがて、彼女は第三の広間をよぎってゆくと、

まわりの壁の孔雀石に彼女もうつつすらと

緑に染まった。彼女は思ってもみなかった、

あらゆる宝石を身につけてこれほど長く歩もうとは。

その宝石も王の輝きにいっそう重さを増し、

彼女の不安で冷たかった。彼女は歩きに歩いた――

そしてとうとう、彼女はほとんど真近から、

電気石トウヤクリンの玉座に憩い、事物のように実在性をおびて

塔のごとく聳え立つ彼の姿を見たとき、

右側の侍女が気を失おうとする彼女の

その身を受けとめ、それから席に着かせた。

彼は手にもつ王笏の先で彼女に触れた、

……彼女は意識のないままそれを感受した、心の内で。

旧約聖書の「エステル記」は、ユダヤ人のバビロン捕囚中のエステルを主人公とした話である。彼女は、ペルシア王クセルクセス（アハシユエロス）が先妻を離縁した後、多数の美しい乙女の中から選ばれて新しい王妃となったユダヤ女性であるが、養父モルデカイから大臣ハマンの全ユダヤ人殺害の陰謀を知り、それを阻止する為に禁令（詔命なしに王のいる王宮の内庭に近づく者は死刑に処せられる）を破って、ユダヤ人助命の嘆願のため王に直訴に行くのである。この嘆願に行く途上の描写が、詩「エステル」の描く場面となっている。エステルの願いはやがて適えられ、逆にハマンは失脚してユダヤ人たちは殺害から救われるのである。この救助を記念して生まれたのが、今日も行なわれている「プリム祭<sup>8)</sup>」である。

こうしたかなり長い「エステル記」の話の筋のなかで、われわれの詩が描く、エステルが王に嘆願に行く場面は、「エステル記」第五章一・二節に相当する。それはこのようである。「<sup>1</sup>それから三日目のことである。エステルは王妃の衣装を着け、王宮の内庭に入り、王宮に向かって立った。王は王宮の中で王宮の入り口に向かって王座に座っていた。<sup>2</sup>王は庭に立っている王妃エステルを見て、満悦の面持ちで、手にした金の笏を差し伸べた。エステルは近づいてその笏の先に触れた。」この箇所は細部の描写のないまったくの粗筋だけである。実は、この「エステル記」の正典に対して、ギリシア語による外典が存在するのである。リルケの詩は、この正典よりもむしろその外典に拠っている。マリアンネ・ジューヴァースの研究によると、リルケの使用していた聖書は、マルティーン・ルター訳に基づく一七七〇年版の聖書であるが、発行者は Joh. Aug. Enax で、刊行地は Minden であり、旧約と新約の両聖書の他に讚美歌集と聖書外典十四篇が収録されていたとのことである。そして、外典の「エステル記」はその第八篇目であったようである。<sup>9)</sup> 新共同訳「聖書」には、外典は「続編」という名称で収録

されていて、そのギリシア語訳からの和訳による「エステル記(ギリシア語)」ではD—十二節が先の正典第五章一・二節にあたる。われわれの詩に対応するその箇所は次のようである。

「一三日目になって、エステルは祈りを終え、礼拝用の衣を脱いで、晴れ着を身にまとった。<sup>2</sup>輝くばかりに装ったエステルは、すべてを見守る救い主なる神の加護を求め、二人の女官を招き、<sup>3</sup>その一人に優雅にそっと寄りかかり、<sup>4</sup>もう一人に衣のすそを持たせて後に従わせた。<sup>5</sup>頬を紅に染めた彼女は、たとえようもなく美しく、その顔には愛らしい笑みをたたえていたが、心は恐怖のためにおびえていた。

<sup>6</sup>エステルは王宮の扉を次々と通り抜け、王の前に立った。王は玉座に座り、きらびやかに正装し、黄金と寶石で身を飾っていた。王はことのほか厳しい様子であった。<sup>7</sup>威厳に満ちた顔を上げ、激しい怒りのまなざしでエステルを見据えた。王妃はよろめき、血の気がうせて顔色が変わり、前を歩んでいた女官の肩に倒れかかった。<sup>8</sup>ところが神は、王の気持を変えて柔和にされた。王は心配して玉座を飛び出して、王妃を腕に抱いた。やがて彼女が気を取り戻すと、優しい言葉をかけて慰めた。<sup>9</sup>王は言った。「エステルよ、どうかしたのか。わたしはお前の兄弟だ。安心するがよい。<sup>10</sup>お前を死なせはしない。予の命令は一般の民に向けられたものだ。<sup>11</sup>こちらに来なさい。』<sup>12</sup>そこで王は黄金の笏を取って、王妃の首に当てる。そして彼女を抱擁して言った。「わたしに話すがよい。』」

この外典は、リルケの詩と筋だけではなく、個々の細部でも対応している。エステルの輝くばかりの装い、二人の女官のお供、心中での恐怖、王宮の扉を次々と通り抜ける道中、王のきらびやかな正装と威厳に満ちた顔、倒れる王妃とそれを受けとめる女官、王によって王妃にあてがわれた王笏などと、このように最初から最後まで

ずいぶん多くの箇所に対応していて、リルケが正典ではなく、外典に拠ったのは一目瞭然である。

それでは旧約聖書との対応はこれぐらいにして、詩「エステル」そのものの考察に取りかかろう。まず冒頭の「七日のあいだ」というのは、たんに聖書の「三日」を「七日」にしたわけではない。これは、エステルが、ユダヤ人の救済を求めて昼夜、断食のうちに神に祈りを捧げたのがこの「三日」間で、詩の「七日のあいだ」はそれに続く、王に嘆願に行くための準備の日数である。冒頭のこの「七日のあいだ」という言葉で、エステルが嘆願の用意にいかにも多くの日数をかけ、その成否に自分の命をかけているのを暗に示しているのである。そして次の、彼女の髪から櫛ですき取った「その悲嘆の灰」(die Asche ihres Grams)と「苦悩の残滓」(ihrer Plage Neige und Niederschlag)とは、エステルが神に祈る際に襲われた「悲しみ」と「苦悩」で、その「灰」と「残滓」というのは、そのとき彼女が華麗な衣服を脱ぎ捨て、香料の代わりに灰と芥で頭を覆い、その身を卑しめた、という聖書外典の記述から来ているのである。これは新共同訳の「続編」では、「エステル記(ギリシア語)」C十二・十三節にあたる箇所である。<sup>10)</sup> さて、詩のこれに続く第一節後半部は、祈りのときの名残をぬぐい去った後の、王の前に出るための用意である。この第一節は、第二節以下を中心場面を引き出すための導入部である。

ついに王の許へ赴かねばならない「その時」(die Zeit)がやって来たのである。この第二節に「彼女は命ぜられもせず」とか、「死者のひとりのように」とか、「近づく者は死なねばならない」といった句があるのは、先に触れた、詔命なしに王宮内の王に近づく者は死刑に処せられるという禁令(「エステル記」第四章十一節)があるからである。彼女が宮殿に入って、女官たちに伴われて歩む通路は、その入口から奥に座る王のところま



で真つ直ぐに通じているのである。彼女は玉座に座る王の姿を眼前に見ながら進んでゆくわけである。王の燦然たる輝きと威厳に満ちた姿に対して、死の恐怖と不安を内に秘めた彼女の感受性は鋭敏に反応するわけである。第三節から第五節は、そうした彼女の反応を、燃え上がる紅玉ルビィ、王の威力を感受してそれで満ち溢れそうな彼女の表情、王の輝きと自分の不安とで重く冷たくなった寶石、それから、王とは直接の関係を持たないが、彼女の顔をうす緑に染める孔雀石、といった鮮やかで豊かな形象でもって多彩に描いている。先の詩「アビシヤグ」でも、アビシヤグの不安を彼女をとり巻く夜の周囲の描写（梟のなき声、震える星、寢室の中を流れる香り、揺れるカーテン）によって間接的に表現し、かえって彼女の不安をいっそう広がりと深みのあるものにしていたが、「エステル」のこうした描写も同じ手法である。リルケはこのような描写手法にも、実に優れた能力を発揮しているのである。

とうとう彼女は、いくつもの広間を通りすぎて、王のごく近くまでたどり着いたのである（第六節）。近くから見る玉座の王は、まるで「塔のごとく聳え立っている」(sich türmen) のである。「事物のように実在性をおびて」(so wirklich wie ein Ding) というのは、リルケにとつて「事物」とは無常の時間を越えて永続する堅固な存在の象徴であるから、「塔」のイメージをいっそう補強し、それに堅固な実在性を与えているものである。エステルははるかな年月を越えて聳え立つ塔のごとき不動の王の姿を目の当たりにしたとき、死を内に秘めた彼女にはそれに耐えるすべもなかったのであろう。「氣を失おうとする彼女」(die Schwindende) は侍女に受け止められるが、彼女は失神してしまふ。

最終節の最後の二行は、この詩の核となるところである。聖書と同じく「彼は手にもつ王笏の先で彼女に触れ

た」のである。それに対して彼女は「意識のないまま」(ohne Sinne)、『それを「心の内」(innen)』つまり無意識のなかで「感受した」(begriift) のである。王とエステルは、内面において結ばれたわけである。リルケが『マルテの手記』について述べた、一九一二年の手紙に次のような一節がある。「なぜかと申しますと、マルテという人物において現れてくるさまざまな力は、ときには破壊につながるようなことがありましようとも、けつして破壊的なものではないからです。それこそすべての偉大な力の裏面でもあるのです。つまり、天使を見れば、けつきよくそのために死なずには済まされないと旧約聖書が表現しているようなものなのです。」<sup>11</sup>「われわれの詩の王も、事物と同じ実在性を持ち、また文字通り生殺与奪の権を一手に持つ者として、天使と並ぶ存在であると言えよう。王とエステルの結びつきは、彼女の失神、いわば意識における死において、初めて可能となりえたのである。

ところで、旧約聖書、特にその外典と当詩「エステル」とが実に多くの点で符合しているのは、これまでの考察から確認したとおりである。しかしながら、この詩の鍵とも言うべき最後の部分は、一見すると聖書とはわずかな違いしかないように見えるが、実はそこには本質的な相違があるのである。外典では先に引用したとおり、「血の気がうせて顔色が変わり、前を歩んでいた女官の肩に倒れかかった」のであるが、意識を失わずに、王との対話が続けられている(D十三・十四節)。そのうちに再度、「王妃は血の気がうせて倒れた」(D十五節)が、元氣を取り戻して王との対話が続くのである。外典では、氣を失いかけて倒れるが、決して失神して意識を完全に失ったわけではないのである。ちなみに、正典では、王妃が血の氣を失って倒れる場面はいっさいない。いざれにしても詩の場合はわざわざ「意識のないまま」(ohne Sinne) という言葉を用いて、意識の喪失を明確に表

現している。そして、この詩には、意識の回復についてはいっさい記されてはいない。これは、いま引用した「天使」について述べた手紙の一節のように意識の喪失、つまり意識における死において、王とエステルは初めて結ばれることができたのである。この詩も先の「アビシヤグ」と同じく、二人の愛をテーマにしたものであるが、その底を流れるのが愛と別離(死)の旋律であろう。しかし前者の詩とは逆に、この詩は愛の成就にウェイトが置かれている。

さて、ここで先の「アビシヤグ」とこの「エステル」の両詩をもう一度振り返ってみよう。どちらの詩も男女の愛をテーマにしていて、パリ時代におけるリルケの愛の思想からすると、その「所有なき愛」の枠内に入るものと言えよう。そして両詩の底には愛と別離(死)のモチーフが潜んでいるのである。このように両詩はテーマもモチーフも同じくするものであるが、前者は王と乙女が結ばれず、後者は逆に王と女性が結ばれるのである。ところで、この後者の愛の形姿であるが、むしろ「所有なき愛」の枠内に入る愛ではあるが、王笏を介しての王とエステルとの触れ合う愛には、中期以降に登場する「瞬時に触れ合う愛」という新しい理想像の萌芽がすでに含まれているのを見て取ることができよう。これは、『マルテの手記』<sup>[12]</sup>や同じ『新詩集』の詩「恋する女」(Die Liebende)<sup>[13]</sup>に見られる、相手の応答をも恐れる「所有なき愛」という一方的な愛の理念を残しながらも、内容としては互いに触れ合うという相互の愛へと変貌を遂げてゆくわけである。『マルテの手記』完成の二年後、一九二二年に生まれた『第二の悲歌』ではこのように歌われている。<sup>[14]</sup>

おんみらはアッティカの墓標に刻まれた人間らしい姿態の慎みに

驚いたことはなかったか。そこでは愛と別離とが

まるでわたしたちのと違った素材で作られているかのよう

あんなに軽やかにふたりの肩の上に置かれてはいなかったか。思い出すがいい、

体軀には力がみちているのに、なんの重みもなくそつとのおつて二人の手を。

この自制した人たちはそれによつて知っていたのだ、そこまでがわたしたちの限度なのだ、

そのように、そつと触れ合うこと、これだけがわたしたち人間のものなのだ。神々なら

もつと強くわたしたちを押しつける。だがそれは神々のことなのだ。

(第六節)

この愛の姿は、かつてリルケがナポリで見た、古代の墓石に刻まれた「オイリュディケと別れるオルフォイス」の浮彫りを歌つたものである。相手の肩にそつと手をのせ合うだけで、永遠の別離と万感の思いを込める慎ましい愛の形姿である。われわれの「エステル」における、王笏を通じて王と王妃の触れ合う姿は、直接このそつと「触れ合う愛」の形姿へとつながつてゆくものと言えよう。この「触れ合う愛」、いわば相互の愛の形姿は、『あらかじめ失われた恋人よ……』(Du im Voraus verlorne Geliebte…)、『C・W伯爵の遺稿より』の詩「うつくしいアグララーヤよ……」(Schöne Aglaja…)、『大道の軽業師(サルタンバンク)を歌う『第五の悲歌』の最終節を経て、最晩年の詩『じつも陽のあたる道路のはたむ……』(An der songgewohnten Straße…)へと連続とつながつてゆき、リルケ生涯の愛の理想像となるのである。そういった意味で詩「エステル」は、リルケ中期の愛の姿でありながら、後期の愛の形姿をも内包する重要な詩であると言えよう。

なお、この詩「エステル」の主人公エステルの姿には、神に祈りを捧げたときの清貧に徹した身、天使や神に近い存在である王の威力を受ける「容器」(つまり、いわば神の言葉を受け取って、伝える預言者の「口」)に等しいもの、失神による意志の消失、ユダヤの民と王との間にあつて命を賭して民の助命を嘆願する仲介者としての行為などによつて、預言者の形姿にきわめて近いものがある。このことも一言指摘しておきたい。

最後に、旧約聖書の女性を描いたこの二篇の詩と絵画との関係に触れておきたい。まず、詩「アビシヤグ」であるが、リルケが彼女を題材とした絵や彫刻などを見たという資料に接したことはなく、また研究者のそうした証言もなさそうで、おそらく当詩との関係はなかつたのではなからうか。次に詩「エステル」の方であるが、エステルを描いた絵やタピストリーは沢山あつて、リルケがそれらのどれかを目にしたという可能性はかなりある。例えば、この詩が書かれた後のことであるが、一九一〇年インゼルの社主アントン・キツペンベルクに宛てた、フランス絵画の鑑賞を勧める手紙で、ワトローやフラゴナールやシャルダン(20)の絵にまじつて、「エステル伝説を描いたとてすばらしいゴブラン織」を推奨している。また、リルケがパリ時代によく通つていたルーヴル美術館には、T・シャセリオー画の「エステルの化粧」(一八四一年)がある。さらには、当詩が作られた一九〇八年初夏よりほぼ二年余り前に、リルケはパリ郊外にあるシャンティイ城のコンデ美術館を訪ねてゐるが、そこにもフィリップ・ノ・リップ画の長持装飾「エステルの懇願」(一四七八年)があり、当時も展示されていたとすれば、リルケの目に触れているはずである。聖書のエステルを題材とした絵画は中世以来流布した図像で、十八世紀のフランスでもゴブラン織のタピストリーに取り入れられていて、リルケがそうした図像を目にする機会も何度かあつたのではないかと推測できる。しかしながら、そうした絵画やタピストリーが詩「エステル」に具体的

にどのような関わりがあったかについては、まったく不明である。

注

- (1) Rilke: SW Bd. 1, S. 486-488.
- (2) Rilke: SW Bd. 1, S. 490f.  
拙稿「リルケ『新詩集』をめぐる考察(一)」——旧約聖書を素材とした詩群における「預言者」像」(ドイツ文学研究)京都大学総合人間学部、報告第三九号(一九九四年)所収)四—一四頁参照。
- (3) 『新詩集』の詩「白鳥」(Der Schwan) (Rilke: SW Bd. 1, S. 510.) 参照。
- (4) Hans Berendt: Rainer Maria Rilkes Neue Gedichte, S. 80.
- (5) 例えば、アイヒェンドルフの『月夜』(Mondnacht)やハイネの『蓮の花』(Die Lotosblume)などには、月夜における「天と地」の照応が歌われている。
- (6) プリギッテ・L・ブラッドレーは、このように述べている。「王とアビシヤグのために選ばれた隠喩、海辺と蒼穹は対照をなしているが、それらがまさにある点で互いに似ているから、補充しあうことができぬ。両者は静的な空間像であって、不変を表している。しかしながら、王の不変は、彼はもはや生と有効な結びつきを持たないところから生じたのであり、アビシヤグの不変は、彼女は星座のように存在につながれているということに根ざしているのである。だから、天空と海のあいだをへだてる間隔が無限であるのと同じように、王とアビシヤグを引き離している裂け目は、架橋することが不可能である。」(Bradley: R. M. Rilkes Neue Gedichte, S. 37)
- (7) Rilke: SW Bd. 1, S. 570f.
- (8) プリム祭の「プリム」とは、ヘブル語の「くじ」を意味し、ハママンが「くじ」を投げさせて、ユダヤ人殺害の日を定めたことにちなんで名付けられたが、ちょうどその日がハママンに味方した敵を滅ぼす日にもなった。こうしてプリム祭は、このユダヤ人殺害計画からの救助を記念して祝われるようになったのである。

- (9) Marianne Sievers: Die biblischen Motive in der Dichtung Rainer Maria Rilkes, S. 8.
- (10) 「エステル記 (ギリシア語)」C 十一・十三節は「エステルの祈り」そのものが記された箇所、その冒頭部にあたる。このようである。
- 「<sup>12</sup>王妃エステルは死の苦悩に襲われて、主に寄りすがった。<sup>13</sup>彼女は華麗な衣服を脱いで、憂いと悲しみの衣をまとい、高価な香料に代えて灰とあくたで頭を覆い、その身をひどく卑しめ、日ごろ喜んで飾っていた部分もすべて乱れた髪で覆った。」
- (11) 一九二二年二月十一日付アルトマール・ホスベルト宛の手紙 (Rilke: Gesammelte Briefe, Bd. 3, S. 206.)。
- (12) 『マルテの手記』の「愛」だつて記やむづらる箇所 (Rilke: SW Bd. 6, S. 941 und S. 832f.) 参照。
- (13) Rilke: SW Bd. 1, S. 621f.
- (14) Rilke: SW Bd. 1, S. 691f.
- (15) 一九一三年から翌一四年の冬にかけての作。Rilke: SW Bd. 2, S. 79.
- (16) 一九二一年三月六日以前の作。Rilke: SW Bd. 2, S. 128.
- (17) 一九二二年二月十四日作。Rilke: SW Bd. 1, S. 701-705.
- (18) 一九二四年六月初めの作。Rilke: SW Bd. 2, S. 166.
- (19) リルケのこうした愛の思想の変遷については、拙稿「C・W伯爵の遺稿より」とその周辺をめぐる一リルケの中期から晩年への詩境の展開 (その四)」「ドイツ文学研究」京都大学教養部、報告第三〇号 (一九八四年) 所収) 二八―七二頁参照。
- (20) 一九二〇年二月七日付アン-ton・キッペンヘルク宛の手紙 (Rilke: Briefe, S. 258f.)。
- (21) T・シャセリオー画の「エステルの化粧」とフィリップ・ツッピ画の長持装飾「エステルの懇願」の所在地については、「キリスト教美術図典」の図像写真第一〇五、第一〇六の説明書き (四五七頁) による。

## 使用テキストならびに参考文献

Rainer Maria Rilke: Sämtliche Werke. Besorgt durch Ernst Zimm. 6 Bde. Insel-Verlag, Wiesbaden 1955-1966.

- Rainer Maria Rilke: Briefe. Besorgt durch Karl Atheim. Insel-Verlag, Wiesbaden 1950.
- Rainer Maria Rilke: Gesammelte Briefe in sechs Bänden. Hg. von Ruth Sieber-Rilke und Carl Sieber. Insel-Verlag, Leipzig 1936-1939.
- Ingeborg Schnack: Rainer Maria Rilkes Chronik seines Lebens und seines Werkes. 2 Bde. Insel Verlag, Frankfurt a. M. 1975.
- August Stahl: Rilke-Kommentar zum lyrischen Werk, Winkler Verlag, München 1978.
- Hans Berendt: Rainer Maria Rilkes Neue Gedichte. Versuch einer Deutung. H. Bouvier u. Co. Verlag, Bonn 1957.
- Brigitte L. Bradley: R. M. Rilkes Neue Gedichte. Ihr zyklisches Gefüge. Francke Verlag, Bern und München 1967.
- Brigitte L. Bradley: Rainer Maria Rilkes Der neuen Gedichte anderer Teil. Entwicklungsstufen seiner Pariser Lyrik. Francke Verlag, Bern und München 1976.
- Wolfgang Müller: Rainer Maria Rilkes „Neue Gedichte“ „Vielfältigkeit eines Gedichttypus. Verlag Anton Hain, Meisenheim am Glan 1971.
- Marianne Sievers: Die biblischen Motive in der Dichtung Rainer Maria Rilkes. Germanistische Studien Nr. 202. Berlin 1938.
- Die Bibel oder die ganze Heilige Schrift des Alten und Neuen Testaments, nach der deutschen Übersetzung Martin Luthers mit erklärenden Anmerkungen. Württembergische Bibelanstalt, Stuttgart 1964.
- 『聖書 新共同訳——旧約聖書統編〇々』日本聖書協会 一九八九年
- 手塚儀一郎その他編『旧約聖書略解』日本基督教団出版局 一九八一年
- 『旧約新約聖書大辞典』教文館 一九八九年
- 柳宗文・中森義宗編『キリスト教美術図典』吉川弘文館 一九九〇年